

「わたしがいのちのパンです」

ヨハネ6:32~35

導入：人の期待するもの

4月に、プロ野球で、千葉ロッテマリーンズの佐々木朗希選手が完全試合を達成しました。最近、あまりテレビを見なくなった私の耳にも、そのニュースは入ってきました。完全試合というのは、相手のチームを一度も出塁させないで勝利するというもので、日本のプロ野球では、約28年ぶり、16度目の大記録だということです。

何か大きなことを成し遂げた人に、私たちは期待します。きっと、次も何かをしてくれるにちがいない、そう期待します。実際、佐々木投手は、その次の試合でも、素晴らしいピッチングをし、なんと史上初となる2試合連続完全試合まであともう1イニングというところまで来ました。観客や野球ファンの期待は、相当高まっていたと思います。大記録が達成されるのを、だれもが見てみたいものです。ところが、このもうあとすこしというところで、監督は佐々木投手を交代させました。この日、既にたくさん投げていたので、佐々木投手の今後のことを考えるなら、それ以上は無理をさせられないという事であったようです。

人間というのは、期待する生き物です。何かを期待していたい、そんなところがあるように思います。何か期待が高まることがと、人々はその自分に自分の見たいものを重ねて、期待をますます膨らませます。ちょっと意地の悪い言い方をすれば、斎藤選手を応援していた人たちが見ていたのは、斎藤選手ではなく、偉業の達成という「自分たちが見たい」と思っていたものだったのかもしれない。そもそもスポーツ観戦は、プロの素晴らしいプレーを見に行っているわけですから、そういうものだと思いますし、私もその場にいたら、きっとそういう応援をしたと思います。でも、そういう中で、斎藤選手自身のことを見ていたのが監督でした。だから監督は交代という冷静な判断を下すことができたのでしょう。

背景1：メシアへの人々の期待

イエスさまの時代のメシア像は、まさに人々の期待の産物でした。旧約聖書にはメシアに関する預言がたくさんありますが、ユダヤ人たちはその預言のことばに自分たちの思いも重ねていました。彼らが望みをかけていた代表的なメシア預言の一つが、申命記18:18です。「わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのような一人の預言者を起こして、彼の口にわたしのことばを授ける。」これは神様がモーセに語られた言葉です。神様が、「あなたのような預言者」と言われているのは、「モーセのような預言者」ということです。

ユダヤ人たちにとって、モーセは出エジプトの立役者であり、偉大なリーダーです。エジプトで奴隷とされていた先祖たちを解放した、政治的な解放者です。イエスさまの時代、ユダヤはローマ帝国の支配下にあり、ユダヤ人たちはローマからの解放を願っていました。まさに、モーセのような解放者が求められ、政治的なリーダーが求められていた時代でした。預言されているメシアが現れたなら、必ずやローマを倒し、自分たちに開放をもたらせてくれるはずだと、人々が考え、期待していました。

人々がその様なメシア像をいっていた時代の中で、主イエスが語られたのが、「わたしがいのちのパンです。」という、今朝のみことばです。あとで、見ていきたいと思いますが、このイエスさまのことばは、私こそ神から遣わされたメシアであるという、イエスさまの宣言のことばでもあります。さらにいうなら、イエス様はここで、父なる神にも等しい存在、すなわち神の御子であることを証ししておられます。真のメシアであるイエス様が示されたメシアの姿、それが「いのちのパン」でした。

背景2：前日の出来事（5千人の給食）

主イエスが「わたしがいのちのパンです」と言われた、その1日前には、大きな出来事がありました。

それは、5つのパンと2匹の魚で5千人を養われた、いわゆる「5千人の給食」の奇跡です（6章の前半1節から15節までに記されています）。わずか5つのパンと、2匹の魚で、イエス様は5千人もの人々の飢えを満ちし、お腹一杯にしました。なおかつ不思議なことに、そこにいた人々が十分に食べた後、あまったパン切れを集めると12のかごがいっぱいになるほど集まったと記されています。

当然のことながら、この出来事は人々を驚かせます。14節には「人々はイエスがなさったしるしを見て、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った」とあります。ヨハネはここで、奇跡のことを「しるし」と言っていますが、「しるし」とはメシアの「しるし」ということです。奇跡は、メシアであるということの一つの「証拠」、「しるし」とされていました。人々は、5千人の給食をなされた主イエスを見て、「この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と、旧約聖書で預言されたモーセのような預言者ではないかと思いはじめました。そうすると人々の期待は膨らんでゆきます。この人がメシアであるなら、モーセのように私たちをローマの支配から導き出し、解放してくれるに違いない。そう考えた民衆たちは、イエス様を自分たちの王にしようとしてしました。そのことが15節に記されています。「イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再び一人で山に退かれた。」これが、前日のお昼ごろの出来事です。

この後、16、17節を見ると、「夕方に」弟子たちは、湖を渡って移動しています。5千人の給食の奇跡が行われたのは、ガリラヤ湖の「向こう側」と記されていますが、向こう側というのは、ユダヤの地から向こう側ということで、ガリラヤ湖の東側と考えられています。弟子たちは夕方に、そこから湖の反対側であるカペナウムへ舟で渡りました。この夜、弟子たちは嵐にいました。そのときにイエス様は湖のうえを歩き、また別の福音書（マタイ14章）によれば、ペテロも数歩ではありましたが、イエス様に招かれて湖の上を歩いたのでした。ヨハネは、そのときのことあまり詳しく書いていませんが、とにかく、イエス様たちは湖の反対側のカペナウムへ移動したのでした。

そして「その翌日」（22節）のことです。5千人の給食に与った群衆たちは、イエス様がいないに気が付きます。彼らは、イエスさまを自分たちの王にしたいとまで願っていた人々です。彼らはイエス様を探して、カペナウムまで追いかけてきました。

噛み合わない、群衆と主イエスのことば

そうやって、カペナウムまで追いかけてきた群衆たちとのやり取りが始まります。その中で、主イエスが言われたのが「わたしがいのちのパンです」という言葉です。しかし、このことばに至るまでの、イエスさまと群衆のやり取りは、あまり噛み合っているとはいえないものでした。群衆が求めているものと、イエス様が与えようとしておられるものが違っていたからです。

イエス様は、自分を追いかけてきた群衆に言います。26節「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」

群衆たちは、5千人を養った奇跡を目の当たりにしてメシアの「しるし」を、そこに見出したように思いました。本来、メシアの「しるし」とは、メシアを指し示し、メシアであるお方に目を向けさせるものです。それが本当の意味で「しるし」を見るということです。ところが、群衆たちはそのメシア自身に目を向けていないと非難されました。「パンを食べて満腹したから」、身体の欲求を満ちしてくれたのだから、きっとこの人は自分たちの他の思いも満ちしてくれるにちがいない。彼らは、自分たちが描いているメシア像に期待しているだけなのだというわけです。

続く、27節「なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。」ここには、なくなってしまう食べ

物と、いつまでもなくなる食べ物との対比があります。それは、この世の食べ物と、永遠のいのちに至る食べ物との違いとです。イエス様は、「それは、人の子が与える食べ物」と言われました。「この人の子に、神である父が証印を押された」(27節)というのは、永遠のいのちに至る食べ物を与える「人の子」を神様が確かなもの、真実なものとして保証して下さったということです。大切なのは永遠のいのちを与える「人の子」、すなわちメシアご自身なのです。

しかし、群衆の関心は、「人の子」ではなく「働き」に向かいます。それで、彼らは「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」と尋ねます。群衆たちは、この神のわざを、自分たちが行うものと考えました。「何をすべきでしょうか」その言葉には、自分たちはそれをきつと行うことができるという響きを含んでいます。律法に生きるユダヤ人らしい考えかもしれません。彼らにとって、「行うこと」というのは大切なことでした。

それに対して、イエス様の言われる神のわざは、神様御自身がなされるわざとして語られています。29節「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」神が遣わした者とは、イエス様ご自身のことです。つまりイエス様はここで、「あなたがたが、私を信じるのが、神のわざである。」と言われました。「何をすべきか」と問うユダヤ人に対して、主イエスは「信じること」、しかも「私を信じること」だと言われました。この御言葉だけをみると、神の業は、人がなす事、人が信じるという行為によるようにも受け取ることができそうですが、聖書の語る救いは神様のお働きがあってはじめて成り立つ、神様の御業です。信仰という人間の応答も重要な要素ですが、その功績で人は救われるではありません。誰のわざなのかと言われれば、それは神様のわざであり、神の賜物、一方的な恵みです。

そんなイエスさまのことばに、群衆は「自分たちがあなたのことを信じるように、どんなしるしを行い、あなたは何をしてくれるのですか。」と反応しました。「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。」(1コリント1:22)と、みことばにある通りです。それが、30節の彼らのことばです。更に彼らは聖書を引用して続けます、31節「私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのパンを与えられた』と書いてある通りです。」彼らは、出エジプトの時に、自分たちの先祖が天からのパンであるマナによって養われたことを引き合いに出しました。それは、あなたがもし自分たちがモーセのような預言者なら、モーセがしたのと同じような「しるし」を私たちにを見せてくれるはずではないのか？あなたは本当に、私たちが待ち望んでいる預言者であり、メシアなのですか？という思いによるものです。それが彼らのことばの意味していることです。5千人の給食の翌日に、彼らはこのようにイエス様に言ったのでした。

主イエスの答え1：モーセよりも偉大な者

主イエスに自分たちのメシア像を重ねてきた群衆が立たされていたのは、主イエスに対する「あなたはいったいどなたなのですか」という核心的な問いです。

今朝のみことばは、それに対するイエスさまの回答です。32節「主イエスは彼らに言われました『まことに、まことに、あなたがたに言います。モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。』」

モーセは確かに偉大な指導者でしたが、大切なのはモーセではありません。天からのパンを本当に与えてくださるのは、モーセではなく、父なる神様です。そして、主イエスはこのお方を、「わたしの父」とお呼びになることで、ご自分が神と非常に親しい存在であることを示されました。モーセは誰よりも神さまと親しい交わりを持った人でしたが、そのモーセでさえ神様のことを「わたしの父」とは呼びませんでした。神を「わたしの父」と呼ぶことは、自分が神と同等の存在であり、神の御子であると述べているの

と同じことであると、当時のユダヤ人たちはとらえました。そしてまさにイエス様が言われているのはそういうことです。これはユダヤ人にとっては許しがたいものでした。

また、彼らは天からのパンとして、マナが与えられたと言いますが、そのマナも神様が与えてくださる「天からのまことのパン」にはかないません。「神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるもの」だからです。このいのちは、永遠のいのちです。マナを食べることで、イスラエルの先祖たちは、地上のいのちをつなぎましたが、それは一時的ないのちでした。マナによって、彼らは永遠のいのちを得たわけではありません。

「天から下って来て、世にいのちを与えるまことのパン」について、群衆たちは聞いたことがなく、それが何か分かりませんでした。そこで彼らは言います「主よ、そのパンをいつも私たちにお与えください。」イエス様は答えられます。35節「わたしがいのちのパンです。」と。「他の誰でもなく、わたしこそが、世にいのちを与える、天から下って来たまことのパンである。父なる神から遣わされた者、メシアである。」と、そのようにおっしゃられたのでした。

「わたしがいのちのパンである」、わたしが何々であると述べる時、英語ならば、I am ○○と言います。それに相当する、ギリシャ語はエゴー・エイミと言いますが、エイミだけでも「わたしは○○である」という意味を持っていますので、「わたし」を意味するエゴーは通常省略されます。しかしここでは省略されずに使われています。聖書の中で、「私は○○である」を意味するエゴー・エイミが省略されずに使われるとき、それは特別な意味があります。それは、「わたしはわたしはある」という神様がモーセに教えられた神様の御名に結びついています。イエス様はここで「わたしはある」という神様の御名を意識して、あえてエゴー・エイミと言われています。それは、イエスさまの神性宣言であるという言い方がされます。ご自身が神と等しい存在であるという主張を含んでいます。イエス様は、ご自身が天から下って来られた者であること、父なる神から遣わされた神の御子であることをここで彼らに伝えておられます。

主イエスの答え2：世に命を与える

ところで、天からくだったまことのパン、神のパンであるイエス様は、どのようにして世にいのちを与えるのでしょうか。現代の私たちは、もうそのことについて知らされています。聖書がこの後の主イエスのご生涯を語り、私たちにイエス様がなされた御業を教えてください。イエス様は、ご自身のいのちを私たちに与えることによって、私たちに、この世に、いのちをもたらししました。いのちとは何でしょうか。聖書の教えるいのちは、この地上の生涯における肉体のいのちだけを指すではありません。いのちの源であり、私たちを愛してくださっている神様との交わりに生きる、霊的ないのちをも指しています。

私たち人間は、自分の力で生きていると思っているかもしれませんが、誰もいのちの原理を知りません。医療技術が発達し、少なからずこの肉体のいのちを延命することは可能になったかもしれませんが、いのちの原理がすべて解き明かされたわけではありません。

聖書は、神から離れ、神を忘れて生きる時、例えこの身体が生きていたとしても、霊的には死んでいると教えています。私たちをお造りになり、愛していてくださっている神様から離れ、神様を忘れて好き勝手に生きることを、「罪」と言っています。「罪」の報酬は、「死」である。そうはっきりと告げています。そして、人はだれもが生まれながらに、この罪の中に歩む者なのです。霊的な「死」のうちにある人間は、いのちの源である神様のもとに戻り、神様の愛に満たされるまで、本当のいのちに生きることができないのです。ユダヤ人たちは、「神のわざを行うためには、何をなすべきでしょうか」と尋ねました。しかし、いのちの原理を知らない人間は誰も、何かを行うことでいのちを得ることはできないのです。いのちの源である神のもとに行き、神様からいのちをいただくほかに、私たちの本当のいのちはありません。永遠のいのちとは、唯一真の神であるお方との交わりに生きる幸いであり、神様からの賜物です。神

様との正しい関係を抜きにした永遠のいのちはありません。

主イエスは、神から離れて好き勝手に生き、神のことが分からなくなっている私たち人間に、神の愛を教え、永遠のいのちを与えるために、この世に来られました。父なる神様に遣わされて、私たちのもとに来てくださいました。天からのまことのパン、神のパンであるイエス・キリストは、私たちに神の愛を教えるために、永遠のいのちを与えるために、ご自身の命を差し出してくださいました。それがキリストの十字架です。クリスチャンは主イエスの十字架のみわざを記念し、それを思い起こすために、十字架で割かれた肉をパンに、十字架で流された血潮をブドウ酒にみたくて、聖餐式を守ります。主イエスが、ご自分のいのちを注ぎだして、私たちに永遠のいのちへの道を開いてくださったことを忘れないため、そして感謝するためです。

今日のみことばの箇所は、まだイエスさまが十字架にかかれるの前の場面ですが、イエス様はすでに人々にいのちを与える、その働きを始めておられます。「神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。」この言葉を、彼らに、そして私たちにお語りになる主イエスは、ご自身のいのちを人々に与えるために、既に天から下って来てくださったからです。

主イエスの答え3：モーセのような預言者とは

ユダヤ人たちは、力強い政治的リーダー、解放者としてモーセを見ました。モーセのような預言者としてのメシアにもそれを期待しました。確かにメシアの解放者という面を持っています。私たちを罪のくびきから解き放つ解放者です。しかし聖書が、モーセについて語っているのは、彼ほど謙遜な人はいなかったということです。神のメシアは、私たちのもとに降って来られ、私たちにいのちを与えてくださるほどに、へりくだられ、誰よりも謙遜を示してくださいました。神様は顔と顔を合わせて語るほどにモーセと親しく交わってくださいましたが、神の御子である主イエスはさらに神と親しいお方でした。神と親しく語ったモーセの顔は光り輝きましたが、主イエスはご自身が栄光のみ姿に輝くお方です。

主イエスの招き

「わたしがいのちのパンです。」そうお語りになった主イエスは続けます。「わたしのもとに来るものは決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」主イエスはいつも、ご自身を私たちに与えようと私たちに招いてくださっています。ご自分のうちにある永遠のいのちに、神様との親しい交わりの中に私たちに招いてくださっています。天からのまことのパンである、私のもとに来て、いのちのパンに与りなさいと、私たちに招いていてくださいます。

今、みなさんは、満たされていますか、それとも飢えや渴きを感じていらっしゃるでしょうか？まだ、イエス・キリストこそ、わたしの救い主であると信じて、告白しておられない方は、ぜひキリストのもとにだけ私たちの飢え渴きを満たす命があるということを知っていただきたいと思います。また、既にキリストのいのちにあずかっている私たちクリスチャンも、日々キリストのいのちに与る恵みにますます生かされたいと願います。パンは命をつなぐ主食です。日本で言えばご飯です。私たちは、日々、キリストのいのちに与り続ける必要があります。みことばにふれ、魂が養われる必要があります。すでに救いの恵みを受けたキリスト者こそ、いのちのパンをよく味わい、神様にご栄光を返すことができます。聖霊に満たされ、神とキリストの愛に満たされることが、私たちの命です。キリストのいのちが、私たちをみたしてくださいるとき、私たちは新しい命に生き、新しい喜びに生きることができます。愛することができないと悩む愛のない者に、人を愛する心が与えられ、神を愛する思いがあたえられます。私たちのために御自身を捧げてくださったお方に、こんどは私たち自身をお捧げしていく喜びが与えられます。賛美と礼拝に生きるよろこびをみなさんと共に味わいたいと願っています